東京芸術劇場のパイプオルガンシリーズ

©Hikaru.☆

春からのパイプオルガン公演はここに注目!

2018年度もオリジナルな企画満載のパイプオルガンコンサートや講座が盛りだくさんだ。今年度前半のメニューをご紹介しよう。

東京芸術劇場のパイプオルガンは東京が、いや、日本が世界に誇れる楽器である。ルネサンスおよびバロック様式のオルガンと、フランス古典から近現代の作品に対応できるモダン様式のオルガンとが背中合わせに設置され、くるりと回転して姿を見せる仕掛けのオルガンは、世界中の教会やホールにも例を見ない。各時代の作品に応じた本格的なプログラムが組まれるのは、芸劇のコンサートならでは。2018年前半もオリジナルな企画満載の公演が楽しめる。

気楽に楽しめるランチタイム・コンサート

ランチタイム・コンサートはお昼の30分間(12:15〜12:45)で気楽に楽しめる公演だ。500円とリーズナブルな価格だが、新進気鋭の若手オルガニストたちが得意なレパートリーを披露してくれる。例年奇数の月に開かれているが、今年は5月7日〜7月20日まで改修工事でホールが休館となるため、4月に最初のランチタイム(26日・木)を開催。芸劇副オルガニストの新山恵理と平井靖子が2台のオルガンを使用する豪華なプログラムだ。曲はA.ソレルの〈2台のオルガンのための6つの協奏曲第3番〉など。7月26日は荒井牧子が登場する。

光の演出も素敵なナイトタイム・コンサート

美しい光の演出がユニークなナイトタイム・コンサートは、19:30〜20:30の1時間。こちらも1000円と低価格だが、贅沢な夜を楽しむには最適だ。クラシック音楽のコンサートには珍しく、鮮やかな照明の演出も楽しめる。闇の中から光り輝くオルガンを見つめて、降り注ぐような音楽に浸ることができる。仕事帰りやディナーの前後にぜひ立ち寄りたい。

4月はランチタイムと同日の26日。この日は夜も超スペシャル・プログラムだ。来たる2020年の東京オリンピックを見据え、日本最大のオルガンから、日本生まれのオルガン曲が発信されるのだ!近藤岳作曲の〈祝祭の譜『東京都歌』による変奏曲〉だ。コンサートでは大オルガンのほか、ステージ、そして3階客席下手側にもポジティフ・オルガンが配置され、全部で3台のオルガンが登場。芸劇オルガニスト4名(小林英之、新山恵理、平井靖子、川越聡子)が勢揃いして演奏するという、スペクタクルな一夜となる。

8月23日のナイトタイムは芸劇オルガニスト小林英之によるコンサート。今年もバッハの名曲をたっぷりと聴かせてくれることだろう。

体感しよう! 大人気のオルガン講座

例年5月に開講されている「パイプオルガン講座〜特別編」(14〜16時)も今年は4月17日の開催。子どもから大人まで誰でも一人10分間、芸劇のオルガンを自由に弾けるチャンス。芸劇オルガニストの先生たちが、音色のセッティングなどをしてくれるので気持ちよく演奏ができる。ルネサンス・バロックか、モダンか、はたまた両方のオルガンか、ひと枠2000円で演奏できるとあって例年大人気!今年度はすでに参加チケットは完売してしまったが、ホールに巨大なオルガンの音色を響かせてみたい方は、ぜひチェックしておこう。

8月10日は、子どもたちにもオルガンの魅力に触れてもらおう。3歳から入場可能のコンサートは、誰もが知るメロディーを壮大なオルガン・サウンドで。紙パイプの工作コーナーに参加すれば、楽器の構造がよくわかる。こちらはハサミの使える年齢(小4程度)から参加可能。夏休みの自由研究にもぴったりなイベントだ。

文:飯田有抄(クラシック音楽ファシリテーター)

ランチタイム・パイプオルガンコンサート

各回12:15開演 コンサートホール ※12:45終演予定

Vol.126 2018年 4月26日(木) オルガン:新山恵理、平井靖子 詳細はP10へ

Vol.127 2018年 7月26日(木) オルガン:荒井牧子

Vol.128 2018年 9月27日(木) Vol.129 2018年11月15日(木)

Vol.130 2019年 1月17日(木) Vol.131 2019年 3月14日(木)

ナイトタイム・パイプオルガンコンサート

各回19:30開演 コンサートホール ※20:30終演予定

Vol.22 2018年 4月26日(木) オルガン:小林英之、新山恵理、平井靖子、川越聡子 詳細はP10へ

Vol.23 2018年 8月23日(木) オルガン:小林英之

Vol.24 2018年10月25日(木) オルガン:シモーネ・ヴェッバー

Vol.25 2019年 2月14日(木) オルガン:ダニエル・ザレツキー

パイプオルガン講座

コンサートホール

第72回 2018年 4月17日(火) **芸劇のオルガンを弾こう!**(予定枚数終了)

第73回 2018年 8月10日(金) **子ども向けオルガン講座** -コンサート-&-こうさく-

■13:00開演 コンサート※3歳から入場可 ■14:00開始 こうさく※4年生以上対象

第74回 2018年 9月27日(木) 14:00開講 第75回 2018年11月15日(木) 14:00開講 第76回 2019年 1月17日(木) 14:00開講

©Hikaru.☆

N響JAZZ at 芸劇

指揮：ジョン・アクセルロッド　ピアノ：塩谷哲

佳き時代への挑戦、再会の喜びに沸きたつ夏

生きた音楽を、贅沢なサウンドで。
それはどの時代にも、人々の夢であり、
音楽家たちの挑戦であった。
名曲ならば、いい音で聴きたい。
しかも、決して古びない、心の若さで――。

ジョン・アクセルロッド

塩谷哲

©Hikaru.☆

ジョージ・ガーシュウィンとレナード・バーンスタイン。アメリカを象徴するふたりの作曲家が、早くも4回目の夏を迎える「N響JAZZ」の看板スターだ。そこに、初回はデューク・エリントン、昨夏はチック・コリア、そしてソヴィエトからショスタコーヴィチが加わって、20世紀の「ジャズ」の彩りを拡げた。

昨年の夏を振り返るなら、ショスタコーヴィチの2曲の間に1930年をまたぎ、バーンスタイン最初のミュージカル《オン・ザ・タウン》のすぐ後に第二次世界大戦が終わり、《ウエストサイド・ストーリー》からの〈シンフォニック・ダンス〉で60年を迎え、チック・コリアの〈ラ・フィエスタ〉で70年代に入った頃にはもう、指揮のジョン・アクセルロッドも、ピアノの塩谷哲も物心がついている。同い年の男の子ふたりは、たぶんピアノを弾いていただろう。

ジョン・アクセルロッドの指揮の師は、ハーヴァード大学の先輩バーンスタインで、もうひとりはサンクトペテルブルクの名教授イリヤ・ムーシン。チック・コリアの〈ラ・フィエスタ〉はスペイン色が鮮やかな曲だが、このオーケストラ版でピアノ独奏を手がけた塩谷哲は、まずはサルサ・バンドのオルケスタ・デ・ラ・ルスのピアニストとして知られた。フランス近代の和声に親近感をもつ塩谷哲は、パリに吹き荒れたスペイン旋風をラテン・アメリカのほうからもみつめられるわけだ。

ここまでくれば、ジョン・アクセルロッドとN響、塩谷哲の再会がその先を夢みるのは自然な流れだろう。すでに決まった曲目では、バーンスタインの戦後作《キャンディード》序曲、ガーシュウィン1920年代半ばの〈ラプソディー・イン・ブルー〉で佳きアメリカを謳歌し、塩谷自作の〈スパニッシュ・ワルツ〉で、現在まで運ばれることになる。もちろん、ここでいう“ジャズ”にも、“ラプソディー”にも、“ワルツ”にもいい意味での懐古的な色合いがある。かんたんに言うなら、それはロマンティックな憧れを抱いた、良い趣味のことである。

2017年のN響JAZZ at 芸劇

©Hikaru.☆

良い趣味、というと言葉は軽いが、こればかりは持ち前の感性や資質によるので、なかなか努力して得ることがむずかしいものだ。わざわざオーケストラの、しかもN響のサウンドで楽しむなら、どれほどリズムの情熱に躍ろうとも、かたちの良さは大切にしたい。なし崩しのスリルではなく、ていねいに仕上げること、そのなかで即興的な自由を息づかせることが、クラシックのオーケストラ演奏の醍醐味だからである。

ジョン・アクセルロッドの指揮でまず忘れられないのが、2013年1月のN響定期だ。バーンスタインの交響曲第2番〈不安の時代〉とショスタコーヴィチの第5番を組み合わせた演奏会で、指揮者は過度な情感や感傷に傾くことなく、多彩な響きにきちんと立体的な構築を施していった。昨夏「N響JAZZ」を愉しみながら、このときの演奏を思い出したのは、やはり的確なバランス感覚と節度を保ち、くっきりと明朗な美観をもってまとめていたからである。

塩谷哲のピアノは、ひかえめに言って、私がこの世でもっとも好きなもののひとつだ。個人的な嗜好はさておき、彼が書く優美なメロディーはリリカルなピアノ演奏と切り離せないし、繊細な色彩、グルーヴィーなリズムも大きな魅力である。なにより、素直な感性が、すっと聴き手の心に沁みこんでくる。

そっと歌いかけるとき、塩谷哲のピアノはやわらかなほどにやさしい。しかし、やさしいためには、確かさがいる。その意味において、彼は頑固である。頑なさというのは、芯のあるしなやかさのことだ。

たとえば、昨夏のアンコールに弾かれた〈Life With You〉を思い出してもいい。ちょっと照れくさいほどのタイトルだが、澄んだ音楽は真率さをそのままに伝えている。思わず涙が滲んでくる、いや涙は零れそうなのだが、堪えるのでもなくそこに自然と留まる――それが塩谷哲のピアノだ。

今回演奏される〈スパニッシュ・ワルツ〉はストレートにぐっと情熱的な曲だが、ジョン・アクセルロッド、N響との再会を喜び、さらに共感に充ちた高揚が導かれることだろう。この機会のために、新たに編曲を施しているというからますます楽しみになる。ガーシュウィンの名作は耳慣れているぶん、プレイヤーたちの個性がくっきりと感じられるはずだ。夏が待ち遠しい。

文：青澤隆明（音楽評論）

8月31日（金）19:00開演 コンサートホール　詳細はHPへ

指揮：ジョン・アクセルロッド　ピアノ：塩谷哲　管弦楽：NHK交響楽団
曲目：バーンスタイン／キャンディード序曲
　　ガーシュウィン／ラプソディー・イン・ブルー
　　塩谷哲／スパニッシュ・ワルツ ほか

マーラー／交響曲第8番『千人の交響曲』

指揮：井上道義

井上道義

©加納典明

マーラー畢生の大作、最大規模の楽器編成と声楽

マーラーを得意とする井上道義が、読響および超大編成の声楽陣とともに啓（ひら）く「千人の交響曲」。絢爛豪華な音の大絵巻。

「宇宙が鳴り響くと思って下さい」――マーラー

序奏らしい序奏も全くなしに、オルガンの強奏に続き、何百人という大合唱がフォルティッシモで讃歌〈来たれ創造主なる聖霊よ〉を歌い出し、続いて打楽器群が炸裂するこの《第８交響曲》の開始部は、実に強烈だ。

交響曲の歴史の中で、これほど凄まじい勢いで開始される曲は、決して多くはない。第１部は、概してこの大合唱とオーケストラの咆哮の連続である。人間の声の強靭さというものを感じさせる一つの例でもあろう。

この曲が1910年９月にミュンヘンでマーラー自身の指揮により、特設会場で初演された時には、858人の大合唱で歌われ、終演後のカーテンコールの際には彼らがいっせいに打ち振るハンカチが夢幻的な光景をつくり出したそうである。その時の演奏者の数は、オーケストラと指揮者を加えて総勢1030人という。「千人の交響曲」という副題は、この初演の興行プロデューサーが、宣伝コピーとして打ち出したものだった。

だが、マーラー自身はその言葉を嫌っていたそうである。おそらく彼は、その言葉に大袈裟なものを感じ、曲の本質はもっと深い、精神的なものにある、と言いたかったのではないだろうか。ともあれ、今日ではホールの関係もあって、実際に１千人もの大人数で演奏されることは、よほどの時でないとあり得ない。

第２部はマーラー特有の壮麗な官能的世界

第１部はラテン語で歌われた圧倒的な聖霊讃歌だったが、第２部は一転してドイツ語による歌詞だ。ゲーテの「ファウスト」第２部最終場面を題材に、美しい叙情色もぐっと濃くなる。長さも第１部の２倍以上。基本的にゆるやかなテンポで、声楽ソリストたちの声が神秘的に交錯する。

長い全曲の最後で、金管楽器群がいっせいに第１部の「来たれ」のモティーフを吹き鳴らし、それが全管弦楽と完璧に調和する時には、私たち聴き手の法悦感も最高潮に達するだろう。それはまさに、「宇宙が鳴り響く」陶酔的な瞬間なのである。

文：東条碩夫（音楽評論）

10月3日（水） 19：00開演 コンサートホール　詳細はHPへ

指揮：井上道義　管弦楽：読売日本交響楽団
ソプラノ：菅英三子　小川里美　森麻季
メゾソプラノ：池田香織　アルト：福原寿美枝
テノール：フセヴォロド・グリヴノフ
バリトン：青戸知
バス：スティーヴン・リチャードソン
コーラス：首都圏音大合同コーラス、東京FM少年合唱団

©読響

読売日本交響楽団「土曜・日曜マチネーシリーズ」

4月7日（土）～2019年3月24日（日）［全20回（土曜10回、日曜10回）］各回14：00開演 コンサートホール

《運命》《新世界》《第九》最高の音楽と過ごす贅沢

完売公演が相次ぐ土曜と日曜の午後２時に開催している大人気シリーズ。2018年度も豪華指揮者ソリストを迎え、珠玉の名曲の数々を極上の演奏でお贈りします。

４月には常任指揮者のカンブルランがベートーヴェンの交響曲第7番で音楽の喜びを爆発させます。同月末には新鋭ショハキモフがチャイコフスキーを振り、名手モンテーロがラフマニノフの傑作協奏曲を披露します。

７月にはジャズ界の鬼才として国際的に活躍する小曽根真がガーシュウィンで共演。

なお、特別客演指揮者の小林研一郎も来年２月に登場し、ベートヴェン「運命」などで渾身のタクトを振ります。

4月7日（土）・8日（日）　詳細はP9へ
指揮：S.カンブルラン　ヴァイオリン：佐藤俊介
モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第5番「トルコ風」
ベートーヴェン／交響曲第7番 ほか

4月28日（土）・29日（日・祝）　詳細はP10へ
指揮：A.ショハキモフ　ピアノ：G.モンテーロ
ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番
チャイコフスキー／交響曲第5番 ほか

7月28日（土）・29日（日）
指揮：L.モルロー　ピアノ：小曽根真
ガーシュウィン／ラプソディ・イン・ブルー
ラヴェル／「ダフニスとクロエ」第2組曲 ほか

ほか8月、9月、10月、12月、2019年1月、2月、3月公演あり　【お問い合わせ】読響チケットセンター 0570-00-4390　【URL】http://yomikyo.or.jp/